



# 図書館だより



53.12

## ひたすらに読み続ける

土屋吉太郎

私は、もう20年以上も芭蕉の「奥の細道」という本を読み続けている。しかし、1冊の本を読み続けているからといって、他の本は一切読まないかという決めてそうではない。むしろ私は乱読気味で、おもしろそうだと思えば種類を問わず読む。そして終りまで読みとおす事もあれば、いやになって途中でやめてしまう事さえしばしばである。だが、「奥の細道」だけはこりもせず20数年間読み続けているのである。

では、いったい「奥の細道」の何が私をとらえて離さないのか、よく考えてみても今もってよくわからないのである。旧制の中学生時代、古典の時間に先生から手ほどきを受け、その後長い間忘れていて、自分が国語の教師となり、教える立場に立って読み返した時、何だか紛失した大事な物が本棚のすみから出てきた様な嬉しさを感じ、以来、今日までひたすらに読み続

けて楽しんでいるというのが実状である。

特に研究してレポートを書いたり、論文にして発表したりというような事は全然考えないでただ読めばそれで楽しいのである。だから親しい友人などからは、「お前のようなやり方は本物ではない。趣味以上に出ないのではないか」とよくいわれる。しかし、楽しいとか、好きとかいうことは感情であって、良いとか悪いとかいう理性の問題とはおのずから違うのである。永い間続いている恋人みたいなもので、今更他人に良いか悪いかと言われてもどうにもならないのもまた実状である。

◇—————◇

芭蕉については、今さらくどく述べても仕方がないので省略するが、芭蕉には多くの句の他に「旅の記」が5つある。「野ざらし紀行」「鹿島詣(紀行)」「笈の小文」「更科紀行」「奥の細道」という順序になる。いずれもすぐれた

「旅の記」で心打たれるのであるが、中でもやはり最後の「奥の細道」は質量ともに最もすぐれたものであると思う。質はともかく、最大の量といっても岩波の文庫本で下の3分の1は解説文になっているもので49ページという長さであるから大した長さではない。慣れれば楽に読める長さである。最初の頃は、読む事自体に抵抗があって一読するのにかなりの時間を要したが、読むにつれて速度も次第に速くなり、今は一時間半もすれば読み終わらせることが出来る。おもしろいもので、自分の好きな「章」のところになると速度が急に速くなり、時にはつい知らずに声を出して暗誦していて、「はあっ」と気がついて思わず、苦笑することもしばしばである。

そうでないところはどうしても速度も遅くなり、休み休みという状態になる。

そして、さらに又、おもしろいことには、数えきれないほどの回数を読んでいるのに、読むたびに何かしら問題を発見することである。

うっかり一字抜かして読んでいて、それを何十回目に気が付き、「あれあれ、これはいけない」と思ったり、時には今まで何気なく読んでいた場所へ急に行ってみたくなったり、「このところは少し調べてみる必要があるぞ」などと問題を発見したりするのである。

そうなる調べるために別の本が必要になって図書館へ行ったり、本屋（特に古本屋など）をさがしたり、出版元へ注文したりすることも出てくるし、又遺跡を尋ねるために旅行のプランを立てたり、その土地の教育委員会へ問合せをしたりすることなどがあつたりして誠に楽しいのである。



読んでいるうちにはその土地へ行ってみたくなるのは人情のつね、そこで奥の細道の跡を尋ねて方々に旅をした。この頃も北陸方面へ先生方と旅行をしたが、金沢では一人仲間からはずれて小杉一笑の墓のある願念寺を尋ねた。一笑は江戸時代の俳人で芭蕉が奥の細道の旅で金沢

を訪れることを知っていて心待ちにしていたのであるが、芭蕉が訪れた時はすでに36才の若さでこの世を去っていた。芭蕉は非常に悲しんで、彼としては珍しく感情をむき出しにして「塚も動け我が泣く声は秋の風」という世の無感情と非痛な調べにうたいあげている。その一笑の墓に詣でるのはこれで3回目である。寺の奥さんは前の2度の訪れをよく覚えていてくれていろいろ私の話に乗ってくれた。帰りにはわざわざ奥まで行って「一笑」についての研究書を持ってきて私にくださったりした。方々歩くとこんなことがよくある。江戸深川の芭蕉庵の跡や出立の地、舟からあがった千住の舟つき場跡等を尋ねた時のタクシーの運転手さんのあまりの親切さに感激してお礼の手紙を会社へさしあげたら、その方が会社から表彰されたと喜んで長い手紙をくれたこともあつた。

飯坂温泉の近くの医王寺 一笈も太刀も五月にかざれ紙のぼり——の句の出来た寺へ2年続けて訪れたら、お寺の奥さんがよく覚えていてくれて、同行の大勢からは入場料をとったが、私からはどうしてもとらなかつた事などもあつた。又、ある時は東北を尋ねて石巻、松島、瑞巖寺、塩釜神社、末の松山、沖の石と縁りの地を歩きまわって最後に夕闇の中を多賀城の碑を求めて知らぬ土地をさまよつたこと。すっかり寂れてしまった市振の宿を尋ね、相馬御風の筆になる——一つ家に遊女もねたり萩と月——の句碑をながめつつ日本海の荒波の音を聞いて感慨にふけたこと。奥の細道むすびの地、大垣の舟出の跡を尋ねた時、道を尋ねるとその返事の後、必ず、「いっていらっしやい」とか「お気をつけて」と一言加えてくれたやさしさに驚いたり、芭蕉の生家のある伊賀上野（こども3度尋ねたが）を訪れた時、上野公園の掃除婦のおばさん達が、私の尋ねる事に答えて「芭蕉さん、芭蕉さん」と必ず「さん」をつけて呼ぶのを聞いて、長野県では果して「一茶さん」というだろうかと感心したこともあつた。

その他、日光、平泉、今町（直江津）柏崎、

北陸の小松、那谷、山中、大聖寺、福井、敦賀、京都嵯峨野と尋ね歩くと、奥の細道はいつも興味深く、読めるのである。昨年一年は長い教職を退いて家にいたので、一日の中の何時間かは心静めて正座し、墨をすって芭蕉の旅の記をはじめから清書した。奥の細道は7冊書きあげ、他の旅の記も皆2冊以上書いた。まだ製本してないので今は私の書齋にうず高く積まれている。

江戸時代の事とて、すべて足で踏破した芭蕉に比べて乗り物を使っての旅は芭蕉の線に対して、まことに点の断続であるというそしりはまぬがれないが、又、こんなことによってこの「奥の細道」の興味はしんと尽きることなく読み続けて楽しんで行けるとも思うのである。

(講師 付属幼稚園副園長)

## — From My Diary —

関 口 信 雄

いつもより何となく気持良く目が覚めたなあと思って時計を見ると9時を少し回っている。

カーテンの隙間から冬の透明な空が見える。

そう 今日日は日曜日だ。それもめずらしく弟子のレッスンも無い正真正銘の休日だ。しかし今までこのような日になると、私は必ずある事を思いつく。そう、部屋の模様替えとか、まあそんな事だ。結局今日はテープの整理、満杯になった楽譜ケースと大型の本箱との入れ替えをすることになる。

まず私はこういう仕事(?)を始める時は、何か音楽を必ず聞きながらする。レコード棚の前で、その日、その時の気分ですれにしようかと迷う。これが実に楽しい。今日はまず「椿姫」的一幕でもかけておこう、と。はりきって楽譜棚から全部の楽譜を床に放り出す。それから別の本棚から本を、これまた全部床に放り出す。これだけで部屋の中は、誰がみても何かを整理しているとは絶対に思えない状態になる。など

と思っている頃には、コトルバスのすばらしいソプラノがヴィオリッタの切なる思いをスピーカーから溢れ出させている。

これを聞いたのが間違いで、それから数十分、コトルバスとドミンゴの熱烈な二重唱に聞き惚れて、全く整理はストップしてしまう。曲は進み、ミルンズの歌うジェルモンの登場、この役は研究生当時歌ったことがあり、いつの間にか散乱している楽譜の中からスコアを探し出して夢中になっている。

再び楽譜の山々との戦いにもどり、決意も新たに整理を始めると、2才半になる娘が、自分のカセットを持ちこんできて、私がヴェルディを愛する以上に熱中している「日本の童謡」をかけ始める。おかげで先ほどの様に気が逸れる心配も無く、ひたすらかたづける。本の山の中から「ヤミ族の原始芸術」なる本を見つけたのはその時で、これが又いけなかった。学生の頃読んだだけであまり気憶に無かったが、パラパラとページをめくっているうちに面白くなり、童謡をバックに読み始める。これは外山卯三郎氏が、台湾本島の東南バシー海峡の孤島に住むヤミ族の生活、文化、芸術について調査研究した結果を記録した本で、写真・スケッチを含めてとても興味深い。童謡をバックの読書も空腹感に気がつくと同時に終り、昼飯にする。結局午前中は部屋を散らかしただけ。

午後になり、スピーカーより流れるカウント・ベイシーの快適なビートに乗って、なんとかかんとか楽譜と本を片付け、一息いれる。こういう仕事をする時はジャズが一番ピッタリくるなあなどと思いながら、ふと先日テレビで見た、ヒットラーの眼下を勇壮なドイツマーチに乗って行進する何千何万のナチス軍を思い出す。

音楽の力が悲しむべき姿で使用された例だ。一休みの後、今度は日頃FMをチェックしたり、レコードのダビング等をしたまま仕舞いこんであるカセットテープの整理にかかる。レコードと違い、きちんとデータを取ってないテープは一つ一つ聞いてみなければならぬので大仕



事だが、中にはすっかり忘れていた何年も前のテープが出てきたりするので楽しい。

学生の頃、大学の合唱団の一員として読売日響と演奏したベートーベン「第九」のテープも何年ぶりに聞く。ステージで一流の音楽家のソロを聞けるのもすばらしかったが、何より指揮者によって同じ曲がいろいろな面を引き出されるに、当時一番感激した。若く、オーソドックスな若杉弘、明るくハッピーなオッテルロー・ジャン・フルネの指揮でN響と演奏した、フオーレの「死者の為のミサ曲」のテープも出てくる。終曲「楽園にて」を歌いながら涙が止まらず困った思い出もある。私が本当に音楽の虜になったのは、今考えるとこの頃だったようだ。

外を見るともう夕方、今日は思いがけない音楽や本を見つけて楽しい休日になった。

これが楽しくて部屋の中をゴソゴソやる癖が直らないのだろう。片付いた部屋に、スタンゲッツのボサノバが流れる。

ああ、コーヒーがうまい。

( 講 師 )

## マークの贈物

兎 東 淑 美

音楽と創作舞踊の会も終りホッとする間もなく、主人の仕事の関係で、グアム島の少年を、一週間あずかることになった。時々この様な機会があることから、今度は、現地の少年か、米国本土の少年かと期待して待った。というのは国民性の違いから何回手紙をやっても全然連絡が取れず、到着の二日前になってから来るのは少年少女合計6名で、我が家にあずかるのは、15才の高校1年生の少年マーク・トゥレイルで日本語が出来ないことがわかった。外国のお客様を迎えることになり、音楽会が終るまではと目をつぶってもらった部屋の片付けを一日かけて済ませ、日曜日の夕食の支度をしているとそこに主人と少年が到着した。大急ぎで迎えに

出ると、1メートル80センチもある大男の少年が立っていた。ニコニコして「コンニチワ」と挨拶をする。余りの大きさに、15才ということをおぼえてしまう程だった。

お茶を頂き乍ら家族の写真を見せてもらう。家族は、両親と姉と弟の5人その他に両親の祖父母のいることがわかった。彼は、現在グアムに2ヶ月いるが2ヶ月後には、ニュージーランドへ行くこと又、彼の本当の家は、アメリカ本土のアイダホ州モスコー市という所であることもわかった。モスコー市は、人口1万7千人、標高1千3百メートル位、緯度にして北海道の旭川に位置する所、ロッキー山脈の中腹らしい。それでも私達は、グアムから来られたので、寒くないかと何度も聞いたが、モスコーと同じくらいで自分は、寒くないと言って私達を安心させた。世界地図を持って来て、アイダホ州のモスコー市を探す。その間、世界各地の地図が出ると、そこの地名をどんでん言ってゆく、私達が、カタカナを読むより早い。父親の仕事の関係で、タイ・セイロン・スエーデン・ニュージーランド・ブラジル・チリ・その他沢山の国を旅行しているらしい。それも1ヶ所、4ヶ月〜6ヶ月、私達が、本や地図だけで憶えたのと違い、彼の頭の中には、世界地図がしっかりと位置付けられていた。もし、日本人が、こんな生活をしていると、日本の教育の場合は、授業についてゆけない。おちこぼれになってしまうので、子供が或年齢になると、父親が、単身赴任して行く場合が多いと聞く。しかし、彼の家族の場合は、いつも一緒らしい。そして、彼の中には、随所に両親の生きた教育がなされているのがわかった。おみやげは、子供達に、貝細工の美しい箱、大人には、ワインと美しい貝製品のアクセサリーと、珍しい貝と、アイダホのロッキ山の美しい花々と動物達のカードであった。私達は、楽しいおみやげを喜び合ってからそれを、仏壇に置いた。——というのは、大切なものは、そこに置く習慣があるから——ところが、彼は、不思議に思ったらしく質問してき

た、「私のあげたおみやげは、気に入らなかったのか？」そこで、習慣を話すと彼は、その意味を理解出来たらしかった。

三日目、お風呂に入る時、日本の習慣を教えてから入ってもらった。ところが、うっかりして最後にお湯を流してしまわない様に話すのを忘れてしまった。食事が終り、次男が、お風呂に行くと戻って来て、小さな声で「ボク、お風呂に入ろうと思ったら、お湯なかったよ」しまった！。やっぱり私が、話さなかったのが悪かった。前回少年をあずかった時は、十数年ぶりに英語を話したので、文型も、何もすっかり忘れて、何かというとプリーズ・プリーズの連続で話したので徒弟達は、私のことを「プリーズおばさん」と呼んで、私自身プリーズおばさんになりきって過した。今回は、少々進歩して、プリーズおばさんを卒業したいと思うが、やはり、同じことの連続で語学力のなさが悔まれた。



しかし、マークも私達の生活に合わせようとしているのが分るし、私達の気持ちも分ってくれてゆっくり話すとだいたいどの様なことを、話そうとしているかわかって来た。外国人が、来られるとそちらに合わせた生活になり、自分の生活を犠牲にする場合が多いけれど、マークの場合は、家族と同じ様に過すことが出来た。というのは、自分の子供と年令が近いので3人の息子を持った様な気持ちになったし、すべてごく自然に出来た。例としては、彼の履物を私が1回なおしているのを見た彼は、二度と同じ脱ぎ方はしなかった。そしてすべての面に心くばりがあった。いたる所で示す彼の明るさ、暖かさ、つつしみ、思いやりは、私達の家族の心を温め

てくれた。そして彼の育った家庭が、彼の背後にあった。だんだん話すうちに、彼の父親は農学博士で、母親は、短大の家政学の教授であることがわかった。そして私が、手作りの皮製品をプレゼントすると彼は、自分のカバンをいくつか出してきた。洗面道具入れは、父親の手作り、可愛い花の絵の皮のお財布は、自分の手作り、カメラのストロボを入れるケースは、デザインも作りも全部自分であることがわかった。そのケースのふちどりは、大変美しいものであった。又お茶の時のクッキーも紅茶も味わって頂き、これは、美味しい美味しいとひとつずつコックリして食べた。彼の家では母親が、クッキーを焼いたり、彼と弟と二人で焼いたりして市販のものを買うことはないそうだ。そして、ケーキのデコレーションもすることを楽しく話してくれた。

三日目は、ホストファミリーと過す日であったので楽しみにしていたショッピングに出掛けた。まずマークの母親から頼まれた、日本的な絵の書いてあるカラフルな陶器の大きなサラダボールが欲しいということで、町のあちこちを探すがなかなか思うのがないまま次の買物に回った。彼自身は、どうも日本製の電機製品と時計が欲らしい。彼に聞くと時計はセイコー、電機製品はソニーと決めて指定である。日本製品の宣伝のゆき届いているのに驚き、反面嬉しくもあった。主人からきく所によると、彼は、どうもお小使いが〇〇円位らしい。一流メーカーの製品を買うには十分なお金とは言えないので主人の計算機を借りて店先でピッピッと打っては、首を横にふって高いと言っている。そんな彼を見ていると何かひとつ助けてやりたい気持ちになった。そんな中で彼は姉のためにラジオを買った。そして主人は、カード型の計算機をプレゼントした。彼は、とても大喜びで、ありがとう、ありがとうの連発であった。そして帰宅すると、日本語の説明書を英訳してもらい新しい計算方法を一心に研究した。とても可愛らしいと思った。そして一番欲しかった時計も買う

事が出来た。

彼が今、一番興味を持っているのは、スケートボードという遊びである。よくテレビでグルグル回ったり危険なものを見るけれども、自分達は、余りやってみたいとは思わなかった。所がマークに引かれて、スケートボード参りとやらになった。アノラックを脱いで、シャツ2枚で始めたが、だんだん集中して汗をかき最後には、半袖シャツ1枚になりそれでもビシヨビシヨになった。その間約二時間半、休みなく続ける練習、その集中力に唯々驚いてしまった。自由に伸々しているが、その集中力が、すべてに伸びる力を持っている様に思われた。

いよいよ、彼と過す最後の晩が来た。悪いことにその日は、私が、忙しく食事の用意が出来なかった。その事を彼に話すと「僕のママも大変忙しい。同じだ」と言ってくれた。何と思いやりのある言葉だろうと思った。外食の後、帰宅してから家族中で音楽会をした。彼は、長いことクラリネットを習っている事がわかり、長男が学校より楽器を借りて来た。どうも使いなれない為か調子が出なかったが、アメリカ民謡を歌ったり、楽器を演奏し合ったりした。そしてピアノは、ほとんど出来ない彼が、一本指で「メリーさんの羊」を弾き出したので、すぐ連弾した。楽しい時が、過ぎた。そして休む前に彼は、封筒を下さいと言った。

翌日、最後のお茶の時に、彼が話し出した。大切な物を置く場所に、私の手紙を置きました。私が、出発した後で読んで下さい。びっくりして、仏壇の上を見ると、昨夜の封筒があった。マークを見送りに出た。家族の者も、マークも本当におなごりおしくて涙が出てしまう。一元気だね！日本に来たら上田に来てね！一車は出てしまった。家族中、ボカンと心に穴が出来たようで淋しかった。

夕食後、静かになり、時計のカチカチなる居間で長男とマークの手紙を読む。

「メリー クリスマス

私に沢山の素適なプレゼントを下さって、ありがとうございました。

これは、私の感謝の気持ちを表わしたものです。この贈物は、家族中の人に贈ります。

さようなら ありがとうございます。

マーク・トッレイル

(これは、アメリカ式のプレゼントです。)

皆さんのそれぞれ欲しい物を買って下さい。」

中を見るとマークのお小使いの半分の額が入っていました。沢山の額で本当に驚いてしまう。もうマークにはお金がなかったでしょう。

何だか胸が、一杯になってしまった。

「マークは、私達に言葉につくせない沢山の暖かいプレゼントを残してくれたね」と長男に話すと、彼も素直に首をたてに振った。

(講師)



## もうひとつの愛読書

—「マノン・レスコー」と私—

石橋和子

現在の私は、小説や文学作品と呼ばれるものを殆んど読まなくなっているが、今を去ること十数年前の高校生であった頃は、兄をして小説中毒患者と命名された程よく小説を読んだものである。洋の東西を問わない手当たり次第の乱読であったが、とりわけ愛読したのは夏目漱石の作品であった。

当時の私は、親への依存から心理的に離脱し人生というものに独りで立ち向かい始めたばかりで、いわば白紙のような精神状態であり、空無に近い未成熟で、未定型な自己のひ弱さを自覚していた。そして、独り立ちし始めたばかりのもろく危うい自己の精神を養い形成するために多大の精神的糧を必要としていた。

自己のひ弱さを鍛え、精神の飢えを充たしてくれるものを捜し求めていた私には、ややペシミステイックな、しかし禁慾的・精神的生き方を描出しているように思われた漱石の作品は、

人生を生きてゆくうえでの揺るぎない指針を提  
供し、抛り所を与えてくれるものであった。

こうして漱石の作品を通して自己形成を遂げ  
ていった私は、十六、七才にして既に一個の老  
成した道学者となっていた。

しかし、その頃同時に、人知れず密かに愛読  
していたもう一冊の本があった。その本を私は  
何度か繰返し読んだが、飽きることを知らず、  
読む度に感激と感動を新たに覚えたものだった。  
その本とはアベ・プレヴォーの「マノン・レス  
コー」である。

この本の内容を簡単に紹介すると、ハムサム  
で家柄はよく、学業は優秀、温和で人好きのす  
る性格で悪徳を気嫌いする模範的若者、シユヴ  
アリエ・デ・グリュウが、勉学の地をめざして  
旅する途中、あでやかで美しい魅惑的な娘、マ  
ノン・レスコーに出会い、一目惚れをする。

マノンは、その遊び好きな性格を矯正するた  
め修道院へ送られるところだった。恋にとりつ  
かれた二人は示し合わせて駆落ちをする。所持  
金の続く間は二人は幸福に酔い痴れて暮らす  
がお金が尽きてくると、マノンはシユヴアリエ  
を愛しながらも安逸の誘惑に勝てず、彼女の美  
しさに魅かれてくる金持の男達をパトロンにし、  
シユヴアリエを裏切る。シユヴアリエは、マ  
ノンに何度も裏切られ、心を傷つけられ、マ  
ノンへの恋ゆえに有為な前途を台無しにされな  
がらも、父や友人から立直りや救いのチャンスを  
与えられても、ことごとく断るといふ具合に、一  
途に恋の情熱に盲目的に従っていく。

禁慾的、精進的生のスタイルをモットーとし  
た高校生だった私が、なぜこの「マノン・レス  
コー」という小説にかくも魅かれたのであろう  
か。

前途ある若者、分別ある若者だったシユヴ  
アリエが、自らの破滅と不幸を招くのが解って  
いても、娼婦的なマノンへのひたむきな愛にひき  
づられてゆくのである。シユヴアリエの恋は、  
いわゆる分別を欠いた恋であるが、有為な前途  
を未練なく捨てて顧みないそのひたすらなる恋

への遵奉が、感動をそそるのである。「マノン  
・レスコー」には恋愛の純粹型、恋愛の極致と  
いふべきものが剩すところなく描かれている。

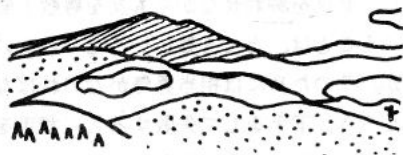
私は、恐らく、シユヴアリエの他のすべての  
ものを捨てて顧みない「ひたむきさ」に魅かれ  
たのだと思う。

ひたむきさとは、いわば情熱（ギリシャ語で  
はパトス、英語ではパッションと言う）をもつ  
ことを言い換えてもよいであろう。情熱を意味  
するパッションという英語には、もうひとつ受  
難という意味がある。情熱が同時に受難でもあ  
るということは、平均を超えたパトスをもつ人  
、人並み以上に情熱をもちすぎる人は、その生  
涯を受難的なものにさせてゆくということを意  
味しているのであろうか。

しかし、パトスをもつことのない分別に満ち  
た生は、模範的ではあろうが、あまり感動を呼  
び起こさない。高校生の頃の私が、「マノン・  
レスコー」に魅かれたのは、青春期にあった私  
が青春期のシユヴアリエの「ひたむきさ」に感  
動を覚えたからであろう。

青春期を通過し、遠ざかり青春を対象化して  
みるゆとりのできた私は、青春の美とその輝か  
しきは「ひたむきさ」において表現されると思  
うのである。現代はア・パトス（アパシー、無  
感動）の時代と特徴づけられ、現代青年を覆い  
襲っているのはア・パトスの風潮であると言わ  
れたりするが、このような時代においてもなお  
私は、「青春の美学はひたむきさにあり」と頑  
固に思い信じているのである。

(講師)



## 西尾幹二著『ニーチェとの 対話』を読んで

1年 倉石三起子

「人は友のなかにも敵を見て、この敵に対し敬意を払うべきである。君は君の友の立場に身を移さずに、友のすぐそば近くまで歩みよることとはできるか。

友のなかに持つのは、最善の敵でなければなるまい。君の気持が友にもっとも接近するのは友にさからっている、その時でなければならぬ」と、ニーチェは言っている。

私は、「友のなかに敵を見る」というこの不思議な言葉に魅かれ、その意味を私なりに考えてみた。

まず、ニーチェの言う「友のなかに敵を見て、この敵に対し敬意を払う」というのは、どういうことなのだろうか。友のなかの敵とは自分の意見と友の意見とがくい違う部分を指していると考えられる。そして、そのくい違う部分を通して、相手が自分の考えを別の角度から照らしてくれる。あるいはその根本を省みさせてくれる、ということであろう。すなわち、友の中の敵の部分は、自分の考え方をより発展させてくれるから、この敵の部分に対して敬意を払わなければならないのだらうと思う。

次に、「友の立場に立たず、すぐそばに歩みよることとはできるか」ということの意味を考えてみると、友の立場に立つということは、自分と友との意見の相違に目をつぶり友と妥協して相手の意見に同化することである。と考えられる。友の意見に同化することなしにしかも友に歩み寄り、つまりお互いに妥協しないでもなお友と協調していけるか、ということであろう。しかし、意見を聞かせながらも友を尊敬し認めるということは、とても難しいことではないだろうか。そのためには相当勇気がなければならぬだろう。下手をして失敗すると、相手を傷つけるばかりか、自分をも傷つけることになり

友をなくすことにもなりかねないからである。

更に、「友のなかに持つものは、最善の敵でなければならない」ということの意味は、自分の欠点を鋭く突いて、自分を伸ばしてくれる、ということであろう。

以上のようにニーチェの言葉のもつ意味を私流に解釈してみたが、ニーチェの言おうとしていることは、友達とは常に自分を批判しながらも自分を伸ばしてくれる者でなければならない、ということであろう。そして、そのような友こそが、親友（「真友」）である、ということなのであろう。

ところで、今の私の身近にある友人関係をふり返ってみると、毎朝長い電車の時間を一緒に過ごしている仲間達である。話すことといえば俳優、歌手などに関する情報、学校の事、窓の外に見える景色とかのとりとめのない話して、楽しく過ごしている。そしてときには、「自分の弱みや迷いや心の醜く恥ずかしい部分をも、冗談まじりに喋れる」相手なのである。このような心を和ませてくれる友達がいるということは、幸せであると思う。

しかし、ニーチェの言う「真友」をもっているかということ、そうとも思えない。今の状況では持てないだろう。なぜならば、友達と意見を聞かせ何う程の意味のある何かをやっていないからである。今の平穩無事な生活に甘えていてただ漠然と幼児教育者となる道を歩んでいるだけだからである。これではいけないと思う。もっと生きる価値を求め、そしてよりよく生きることを考えなければならないとも思う。

生きる価値を求め、よりよく生きるとは、ニーチェの言う「高貴に生きる」とことと関係しているのではないかと思う。では、「高貴に生きる」とはどういうことなのだろうか、「まず自省を第一基盤にして、そこから出発すべき」ことなのだろう。内省の力をもって、自己のあり方や生き方を反省し、自分の欠点や欠陥に目をつぶらずにそれを勇気をもって認め克服していくよう努めることなのだろう。それに



は、勇気が必要である。なぜならば、それは今までの自己を覆すほどのことにもなるからである。よく生きようとする高貴な生き方は、それゆえ、自己を鍛え磨いてゆくことなのである。自己を磨くことを目指す人は、自分を鍛えてくれる他人を友として受け容れてゆくだろう。

このように、自己を鍛えながら、人間と交わり、言葉を交わし、意見を闘わず中で、「真友」と巡り会うことができる、というのがニーチェの友情観のように思われたが、こうしたニーチェの考え方は私に友情について改めて深く考えさせてくれるきっかけともなり、また大きな刺激ともなったように思う。

## 私のつぶやき

2年 横沢康子

吉田兼好の「徒然草」137段に、次のような部分がある。

「花は盛りに、月は隈なきを見るものかは」現代語にすると、

「桜の花は満開を、月は一点の曇りもない、澄みわたった満月ばかりを見るものであろうか（そうとは限らない）。」となる。

また、こういう部分もある。

「咲きぬべきほどの梢、散りしをわたる庭などこそ、見所おほけれ。」現代語では、（桜について言えば）これからまさに咲きそうだという頃の梢だとか、花が散ったり枯れたりしている庭のながめなどは、真盛りの花よりもかえって見るべき点が多いものである。」という意味になる。それまで私も世間なみに、花は満開であればと散っている最中がよく、月は満月、すすきとおだんごがあればなお良いと思っていたものだ。だからこういう考え方に始めて接して、とても強く印象に残った。そしてだんだん、真盛りだけがいいのではなく、うつりかわってゆくその時々、それなりの美しさがあると思うようになっていった。

そんな私がこの曲を聞いたとき驚いてしまっ

た。

……（前略）……

次の夜から、かける満月より

14ばんめの月が いちばん好き……

これは今をときめくあの松任谷由実の「14ばん目の月」の中の一節だが、

「うわあ、兼好さんじゃない。懐かしいなあ。」と思ってしまったのだ。そして、古典と現代の詩に共通点があるとはおもしろいと思った。

× × × × ×

感性というものについて考えてみた。知る人ぞ知るフオークシンガー泉谷茂（最近ではテレビドラマにも出演している）が、こういう意味のことを話していた。

「女は17、8の頃がいちばん感性がするどく、男の25でもかなわない。けれど、はたちを過ぎるところからおとろえはじめ、23、4はただのばかになる。」と。

また、どこかにこういうことが書いてあった。「男は成長するに従って子ども、少年、青年、中年、老年の要素が積み重なっていく。言いかえれば、大人の男は、子どもの部分もあるし、少年の部分もあるし、大人の部分もある。ということだ。式にしてみると次のようになる。

子ども=子ども

少年 =子ども+少年

青年 =子ども+少年+青年

中年 =子ども+少年+青年+中年

老年 =子ども+少年+青年+中年+老年

ところで女は、成長するにつれ、積み重なっていくのではなく変転する。移りかわっていくものだ。大人の女は、大人でしかない。」と。

そういうものかなと思った。そしてくやしい気持ちになった。今まで持っていたもの、感性（精神のきらめきや、物事に感動する心、翔びたつことのできる勇気などのことだと思う。）や、子どもらしさ、少女らしさなどをなくしてしまう。どこかへやってしまう。それがすごく惜しく思い、くやしさを感ずる。私はいつまでもそういうものを持っていたい。なにも男になりた

いということではなく、そういうものを持ち合わせつつも、れっきとした女として生きていきたいと思う。

× × × × ×

みんなは価値観というものをどう考えているだろうか。私は「自分にとって、大切に思えること、才一義に思えること、よいと思えることは何であるか」というふうに考えている。本当の意味はちがうのかも知れない。私にとってこの価値感という言葉は象徴的意味を持っている。私には、年の離れた(8才ちがう)兄がいる。私が小さかった頃、その兄が父と話をしている意見がくいちがった時、兄がこう言った。

「それは価値観の違いだね。」

私はまだ、ほんとに小さく、2人が何のことを話しているのかさっぱりわからなかったが、兄の言ったこの言葉が妙に頭に刻みこまれたのだ。兄は、今の私より若かったはずだが、私にはすぐく大人に見え、価値観という言葉が使えるようになることが大人である証のように思えたのだ。今は、使えたとしてもまだ私はおとなではないとわかっているけど、この価値観という言葉に愛着があるのだ。

× × × × ×

さて私のつぶやきはこれ位にして、しめくりをしよう。世の中のさまざまな対立も価値観の違いに由来するように思える。又、今まで生きてきた環境、自分にいやおうなしに(批判力のなかった時代に)与えられた影響が、人によって違うのだから、価値観が違うのはあたりまえ、考え方が違うのもあたりまえと思うのだ。違うからといって対立しあうのはへんだ。カッコと興奮して聞くから、相手を憎みながら聞くから、中立点なんてぜったいにないように思えてくるのだと思う。自分と違う意見も「あゝそうですか。」というかんじで落ちついて聞けばいいと思う。落ちついて聞いていれば中立点はみつかると思う。

人と争わない、おだやかな、考えるおとなになりたいと、卒業をひかえた現在、思っている。

## 『ソクラテスの弁明』 を読んで

— ソクラテス(S)と私(I)の対話 —

1年 丸山ひさ子

- I 今、日本の社会では「受験戦争」と云う言葉が大はやりですが、ソクラテス大先生は御存知でしょうか。
- S なになに「受験戦争」? そりゃ一体何の事かね。
- I 日本の青少年が挙げて「一流高、一流大学」をめざすことです。そのため、鎗ぎをけずって人より余計に勉強します。中にはノイローゼになり、自殺する者まで出るので。
- S 何のために一流学校をめざすのかね。そのためにどんな勉強をするのかね。
- I 一流大学を出ると希望の就職が出来て、生活が安定し、偉くなれるからです。若者はそれをめざして、英数国理社といった広範囲の学習を連日連夜積み上げます。中には塾に行ったり家庭教師をつけたり……。
- S それは面白い……と云うのは、私のアテネも、そんな具合だったので……若者はソフィストに踊らされて、自分の出世ばかりを考える様になっていた。
- I 大先生は、そんな社会の風潮にどんな態度をとられたのですか。
- S 勿論厳しく批判したよ。才一に人の頭をはねのけて、自分だけが幸せをつかもうなんて考える若者ばかりになっては、国家の滅亡だ。才二に多くの若者が、そのために希望を失うことになる。だって受験勉強で努力した全員が一流大学に入れるわけでもないし、政治家や医者や弁護士になれるわけがない。
- I それで大先生は、社会批判の大演説をして歩かれたのですね。
- S 若者がそんなではいけない。国家の将来もそんな状態ではだいなした。だからもっと謙虚になりなさい、と強調したまでさ。
- I その大先生の演説が時の政府の逆鱗にふれて……。

S そうなんだよ。貴族や金持ちや政府高官たちはやはり自分の息子の出世しか考えないからね。

I 大先生を「世の中を乱す者」と極めつけて死刑の宣告をした……。

S いや、あれには参ったよ。法廷でいろいろ弁明したんだがね。弟子のプラトンが書いてくれた『ソクラテスの弁明』を読んでくれたかね。

I はい、大学の先生から読んでレポートするようにと課題に出されて……。むずかしかったけれど必死になって読みました。やっと「無知の知」の意味がいくらか、わかったような気がします。つまり、あなたは私たち人間はややもすると自分は、何でもよく知っていると思いがあって、自分の知を誇ろうとするが、実際のところ私たちはよく知ってはいないことを知っているように思いこんでいるだけで、とくに人生において、最も大切な知るべき事柄としての、「よく生きる」ということのその「よく」の内容については、全くといっていい位解っていないし無知である、とおっしゃりたいのですね。そして私たちは自分たちが無知なのだという自覚から出発する、つまり自分たちの無知を知るという謙虚な姿勢から出発することが大切なのだとおっしゃりたいのですね。

S ありがとう。「無知の知」を理解してくれたなんて、たいしたものだ。世の中は受験の五教科をものにしたなんていばっている奴が多くてけしからんね。

I 私は、それが出来なくていつも僻んでばかりいました。

S 僻みもよくないが、五教科など出来なくて結構。自分を愛し、人を愛し、国を愛する気持ち、徳があれば、それが一番なんだから。ところで今君はどんな大学にいるのかね。

I 上田女子短期大学です。とてもいい先生ばかりで、高校時代五教科が出来なかった私達ですがいつも励まして下さいます。

S そりゃあいい大学だ。そこで大いに自分をつくりあげたまえ。立派な人格になるのも

幼時から……それに立派な国家づくりの土台もいい幼児づくりからだ。努力して秀れた先生になりなさい。

I ありがとうございます。これからも時々私の前に現われて大先生の演説を聞かせて下さい。大いに励みになります。

S そうしよう。それでは元気でな。最後の一つでも謙虚な気持ちを忘れないでな。我輩を君らに紹介下さった倫理の先生によしく伝えてくれたまえ。さらば……

I 大先生、大先生……（まだまだ会話をしたかったが、ソクラテスは急に私の前から消えてしまいました。）

## 学生の声

11月30日のクラス  
代表者の話し合いの中  
から

( )は希望数

### ◎購入希望図書

#### (1)文学関係

- ・文学全集(日本・世界)手軽に読めるものに。古典—現代語訳のわかりやすいものに(2)
- ・推理小説(1)  
希望する作家—江戸川乱歩。横溝正史(2)。  
森村誠一(3) 松本清張(2)
- ・小説類(現在の活躍中の作家を多く)  
希望する作家—森村桂(2) 新田次郎(2) 田辺聖子。石川達三。柴田練三郎。遠藤周作(5) 城山三郎。石坂洋次郎。半村良。ヘッセ。サガン等、芥川賞の受賞作家。単行本を多く。

#### (2) 教育・幼児教育関係

- ・手あそびの本(3) わらべうた。児童遊戯の本、童話、絵本。子供むけ動物図鑑。幼児教育、障害教育等の実践記録の本(ネムの木の子守歌) 幼児絵画の本。

#### (3) その他、一般

- ・手芸の本、あみもの、人形(新しいもの)(2)
- ・料理の本、お菓子の本(新しいもの)(2)
- ・卒研参考図書 ・楽譜(スコア、オペラ、アリア集) ・妖精文庫 ・エッセイもの多く。・マンガ(小さな恋のものがたり、スケバン刑事) ・調べるための本より読む本を多く。

### ◎図書館に対する意見

- ・時代遅れの本多い。古い。 ・書架の本の入れかえをしてほしい。
- ・図書委員を選んで本の修理をしたらどうか。
- ・破損した本、古い本を買いかえてほしい。
- ・うるさい。さわがしい。特に暖房が入ってからのたまり場になっている。

#### — 図書館から —

始めて学生の声を聞く機会がえられた。図書委員会でも充分検討を重ねていきたいと考えている。

# 目録規則と本学図書目録について

## ○はじめに

図書館の図書資料を的確に、能率よく探し出すために、図書館には目録カードがあり、著者名目録、書名目録、分類目録（書架目録）の三種の目録カードが閲覧用としてある。目録は、「日本目録規則」ののっとり作成されているが、わが国の目録規則も欧米の近代の目録規則の発展動向に合せ、国際的標準化に対応させる必要ありと本年はこの目録規則に大巾な改正が行なわれ、各図書館も導入を始めた。

本学はこの4月受入図書からこの適用を試みている。

以下は従来のカードと新カードとの相違を実物カードの上で説明することにしたい。

## ○一般目録カード

〔従来のカード形式〕

372.1
0 24 小川 利夫
青年期教育の思想と構造
東京 勤草書房 1978
357 P 22 cm
No.15262 I 小川 利夫
年 53.11.8

〔新カード形式〕

請求記号	372.1
0 24 青年期教育の思想と構造 小川利夫著	←書名、著者標示
東京 勤草書房 1978	←出版事項
357 P 22 cm	←対照事項
No.15262 1.書名 a1.オガワ トシオ 372.1	
年月日 53.11.8	
↑ 3,000	
標目指示 (書名) 標目指示 (著者) NPによる分類番号	
カード上の綴り( a は author の略 )	

尚、詳細にわたる説明が必要だが、専門的な分野にわたるので、ここでは省略する。原則として今後のカードは上記の様な形式で記入されることを認識されたい。

又、カードは各々従来のカードと混合排列されるので、全集、双集ものに一部記入形態の違うカードが並ぶことがあるが注意されたい。図書記号も従来方式で付記されるので書架配列上は今までと変わらない。

## ○逐次刊行物目録カード

以上の他に図書館資料の中で新聞、雑誌、紀要類、年鑑類の逐次刊行物の目録も、これを機に整備することとし、過去十余年分を整理して、次の様な記入の形式とした。

(一般書、参考書との識別上、すべてブルー)

〔逐次刊行物目録基本カード〕

請求番号 P376.1	保育の友 第22巻4号(昭和49年4月)——	誌名
Periodicalsの略371.6はND Cによる番号	東京 全社協	(所蔵中の最初の号)以下open entry
	26 cm (月刊)	所蔵事項カードへつづく
	(次のカードへつづく)	

〔逐次目録、書名、分類カード〕

P376.1 保育の友 第22巻4号(昭和49年4月)——	←書名カードは誌名のローマ字綴で一般書と同じ排列
東京 全社協	←分類カードは番号順排列但し、雑誌はPを除いた形で紀要は05 1.1に年鑑類は一般書と同じに排列
26 cm (月刊)	
所蔵事項は事務用基本カードを見よ	

〔所蔵事項カード〕

P 376.1	誌名	発行所		
	保育の友	全社協		
登録番号	巻 号	年 月	備考	製本月日
1	22	4-12	1974 4-12	53.7.13
2	23	1-12	1975 1-12	//
3	24	1-11	1976 1-11	9.12欠号 //
4	25	3-12	1977 3-12	1.2,11欠号 //

以下合本製本ごと在所蔵を記入

又、本年からは紀要類のコンテンツ・シート・サービスを完成させたので、この紀要類の目録（特に所蔵カード）と合せ利用されれば、以前よりは少しでも研究の便宜がはかれるものと確信している。

尚、目録カードの引き方がわからない人は係にたずねて下さい。

(司書 長張)

※ Reference Book (参考図書) ※

— 本年度収集の主な参考図書 —

- |  |  |  |
|--|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>• 仏教聖典 増補版</li> <li>• 障害児教育事例集上、下</li> <li>• 幼児事故相談ハンドブック 加除式</li> <li>• 子どもの心理、しつけ事典</li> <li>• 学生の音楽事典</li> <li>• 身体障害事典</li> <li>• 日本史用語大辞典、用語篇、参考資料篇 辞典編集委員会編</li> <li>• 哲学、思想に関する 10年間の雑誌文献目録 S 40～S 49</li> <li>• 日本保健関係文献集 1～3</li> <li>• レクリエーション事典</li> <li>• 日本古代人名辞典 1～7</li> <li>• 長野県野鳥図鑑</li> <li>• 長野県野草図鑑上</li> <li>• 知能障害事典</li> <li>• 新聖書大辞典</li> <li>• 青少年白書 1977</li> <li>• 婦人労働の実情 1978</li> <li>• 婦人白書 1978</li> <li>• 日本教育年鑑 1978</li> <li>• 子ども白書 1978</li> <li>• 児童心理学の進歩 1978</li> <li>• 保育学年報 1978</li> <li>• 保育年報 1978</li> <li>• 保育白書 1977</li> <li>• 厚生白書 1977</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>東大仏教青年会監修</li> <li>辻村泰男編</li> <li>文部省内幼児事故研究会編</li> <li>品川孝子編</li> <li>浅香 淳 //</li> <li>小池文英等 //</li> <li>辞典編集委員会編</li> <li>雑誌文献目録編集部編</li> <li>小林芳文等編</li> <li>日本レクリエーション協会編</li> <li>竹内理三等編</li> <li>羽田健二等 //</li> <li>奥原弘人 //</li> <li>内山喜久雄等 //</li> <li>馬場喜市 //</li> <li>中央青少年問題協会編</li> <li>労働省婦人少年局 //</li> <li>日本婦人団体連合会 //</li> <li>教育年鑑刊行委員会編</li> <li>日本子どもを守る会 //</li> <li>日本児童研究所 //</li> <li>日本保育学会 //</li> <li>全国社会福祉協 //</li> <li>全国保育団体合同研究集会編</li> <li>厚生省大臣官房室編</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>三省堂</li> <li>東大出版会</li> <li>オ一法規</li> <li>あすなる書房</li> <li>音楽の友社</li> <li>岩崎学術出版</li> <li>柏 書房</li> <li>日外アソシエーツ</li> <li>J. M. S Inc.</li> <li>不昧堂 (体研)</li> <li>吉川弘文館 (塩入研)</li> <li>信 毎</li> <li>岩崎学術出版</li> <li>キリスト新聞社</li> <li>大蔵省印刷局</li> <li>草土文化</li> <li>ぎょうせい</li> <li>草土文化</li> <li>金子書房</li> <li>フレーベル館</li> <li>全社協</li> <li>草土文化</li> <li>大蔵省印刷局</li> </ul> |
|--|--|--|

NEWS

— 自動製本機の利用のおしらせ —

本年は、図書館に自動製本機(バインド・クイック)を購入した。開学以来山積みされた雑誌のバックナンバーを合本製本するのが目的だが、先生、学生の便宜をはかるため、1冊に付100円で製本サービスを行っている。卒研や、コピーの製本に利用して下さい。

又、入口近くの柱にカチッ、カチッとなる機具がついて不思議がっている人が多いが、これはドア・チェッカーで、毎日の入館者数を調べるためである。ちなみに9月以降の入館者を昨年と比べてみたのが下表である。

本 年 度				昨 年			
月	9	10	11	月	9	10	11
人 数	5,027	5,013	6,531	人 数	2,529	2,691	3,625
1日当入館者	239	227	296	1日当入館者	115	123	165

## 寄贈図書 — 53 年度主な寄贈 —

- |                                |            |              |     |
|--------------------------------|------------|--------------|-----|
| ・長野県史 近世史料編(長野県)               | 長野県史刊行会    | 長野県教育委員会     | 寄 贈 |
| ・讃岐典侍日記 全訳注(松本元子)              | 講談社        | 須永淑先生        | //  |
| ・自閉児と共に育つ子どもたち(安田生命社会事業団)      | たいまつ社      | //           | //  |
| ・自閉児のための生活療法(武蔵野東教育研究所)        | たいまつ社      | //           | //  |
| ・信州画人外遊記                       | 岩谷画廊       | 林幸四郎先生       | //  |
| ・朴正熙—その人とビジョナー(吉典植著)           | サンケイ出版     | サンケイ出版       | //  |
| ・唐沢俊樹(有竹修二)                    | 唐沢俊樹伝記刊行会  | 唐沢俊樹伝記刊行会    | //  |
| ・何でもわかることばの百科事典(平井昌夫)          | 三省堂        | 紀伊国屋書店松本営業所  | //  |
| ・碌山美術館誌(碌山美術館)                 | 碌山美術館      | 碌山美術館        | //  |
| ・塚田菁紀遺歌集(塚田菁紀)                 | 新星書房       | 故著者夫人塚田みすず氏  | //  |
| ・時差は金なり(三菱商事広報室)               | サイマル出版会    | 三菱商事株式会社     | //  |
| ・どう考えるか母なるもの(河合隼雄)             | 二玄社        | 二玄者          | //  |
| ・日産自動車史 1964~1973(日産自動車史編算委員会) |            |              |     |
|                                | 日産自動車 KK   | 日産自動車 KK     | //  |
| ・トヨタのあゆみ(トヨタ自動車編算委員会)他 2 冊     |            |              |     |
|                                | トヨタ自動車 KK  | トヨタ自動車 KK    | //  |
| ・スモン・ウイルス説の足どり(中山孝)            | 医薬ジャーナル社   | 医薬ジャーナル社     | //  |
| ・日本はよみがえるか(松下幸之助)他 1 冊         | PHP 研究所    | 松下電器産業 KK    | //  |
| ・海野町史(中沢好富)                    | 海野町商店街振興組合 | 海野町商店街振興組合   | //  |
| ・香辛料Ⅳ(山崎峯次郎)他 1 冊              | エスビー食品 KK  | エスビー食品 KK    | //  |
| ・大蔵経要文集正読版(住谷慧秋)               | 横浜信人社      | 住谷美代子氏       | //  |
| ・うたのいしぶみ歌謡曲集(松尾健司)             | KK ゆまにて    | 作詩家西沢爽氏      | //  |
| ・仏教保育の手引き(浄土宗保育協会)他 2 冊        | すずき出版      | にしど教材        | //  |
| ・ゲルマニウムと私(浅井一彦)他 1 冊           | 玄同社        | 本学二年生父兄柳沢克雄氏 | //  |
| ・小麦から小麦粉へ                      | 製粉振興会      | 製粉振興会        | //  |
| ・私の人物観(池田大作)他 2 冊              | 湖出版社       | 創価学会広報室      | //  |

◇ ————— ◇ ————— ◇ ————— ◇ ————— ◇ ————— ◇

## 編 集 後 記

窓の外、独結山のそのむこうの美ヶ原に先日  
うっすら白いものを見たが、たちまち真白にな  
ってきた。図書館内の人たちの本に向う姿は暖  
く力強い。今年の歩みをふりかえりつつ、図書  
館だよりをまとめる。

今回も先生方はじめ多くの方々の御寄稿を得

て多彩な内容を盛りこめたことを幸と思う。

読み、考え、共に歩むよりどころとして、ま  
すます利用されるように、適切な内容を協力し  
てつくり出していきたいと思っている。

(須永)

上田女子短期大学 図書館だより 第 5 号 1978-12-15 発行

編 集 上田女子短期大学図書委員会

発 行 // 図 書 館